

# toi toi toi!

トイトイトイ！

ステージはそこにある

vol.03

2025.03

飯田文化会館

情報誌

Iida Cultural Hall  
Information Magazine

みる・演じる・ささえる 人形劇のまち  
つながる輪と未来への夢 後藤 渉

人と人、地域を結ぶ市民オーケストラ 飯田交響楽団

石川かおり

江戸時代から続く伝統の「大鹿歌舞伎」と  
それを支え続けた祖父の生き様に憧れて

GLIM SPANKY

夢をカタチに“原点”となったこの地で最高のステージを

# toi toi toi!

トイトイトイ  
vol.03  
ステージはそこにある

みる・演じる・ささえる 人形劇のまち  
つながる輪と未来への夢

## 後藤渉

獅子を舞う男、人形劇俳優  
NPO法人いいだ人形劇センター事務局

飯田市出身・在住

GOTO Wataru

### INDEX

#### TOWARD THE NEXT STAGE

後藤 渉

#### CurtainCall いいだ文化の軌跡

飯田交響楽団

#### AIIDA わたしの視点

石川 かおり

#### PICK UP !

GLIM SPANKY 南信州凱旋ライブ

事前インタビュー

#### REPORT・INFROMATION

新しい文化会館整備検討状況

令和7年度 飯田文化会館事業計画



## TOWARD THE NEXT STAGE >>>>

毎年8月上旬に開催される国内最大級の人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」。国内はもとより世界各地からプロ・アマチュアの劇団が一堂に会し、市内各地で公演を繰り広げます。期間中は伝統人形劇から現代人形劇まで多彩な人形劇が市内のあちこちで上演され、まち中が舞台に。また、“みる・演じる・ささえる わたしがつくるトライアングルステージ”をキヤッチフレーズに、こども・大人の市民の皆さんが出でます。いいだ人形劇フェスタの大きな特長です。

この“みる・演じる・ささえる”という3つの柱全てに携わってきたのが「わたちゃん」

の愛称で知られる後藤涉さんです。幼少時代から人形劇フェスタを見て育った後藤さんは、中学生の頃からボランティアスタッフを務め、19歳で「獅子を舞う男」としてデビュー。獅子舞と人形劇を融合させた独自の作品で人気を集め、文化の伝承を目的とした「わたちゃんのダンボール獅子舞ワークショップ」を引っさげ、全国を飛び回るなど活躍しています。

「表現の原点になったのは4歳のときに始めた地元の獅子舞。小学校の総合的学習で人形劇に取り組み、その後ボランティアでフェスタに携わるようになって舞台の魅力にどっぷりハマりました」。

松本の高校へ進学し、移り住んだ地で

人形劇団「やまんば」に入団。人形劇の基礎を学び、自身の舞台制作にも励みます。卒業後は飯田へ戻り、社会人として働く傍ら、幼稚園や保育園、高齢者施設、図書館などで獅子舞を披露するボランティアをライフワークとして続けてきました。

「原動力になっているのは『こどもたちに文化を伝えたい』『飯田の魅力を伝えたい』という思い。これからも獅子舞や人形劇を多くの人にアピールしていきたいですし、自分の舞台をきっかけに興味を持ち、好きになってもらえたならうれしいです」

熱意をもとに繰り広げられる後藤さんの舞台は、世代を超えて観る人を楽しませる魅力にあふれています。

## 個性が交わり広がる新たな可能性

令和6年8月2日、いいだ人形劇フェスタで上演された劇団WAKWAKイイダの舞台「旅するりんご」。この舞台上にも後藤さんの姿がありました。メロンなどの果物や多彩なキャラクターに扮し、演じ分ける後藤さんと、その姿にキラキラとした眼差しを向ける子どもたち。劇団WAKWAKイイダは、地域で活躍する多彩なアーティストがタッグを組み、令和6年4月に結成された劇団です。いいだ人形劇フェスタは劇人や劇団、アーティスト同士の交流の場にもなっており、この機会にしか見られない特別な舞台や、ユニットの結成が実現することも多くあります。

「初めてほかのアーティストとコラボレーションしたのは20代前半のとき。音楽的道化師ましゅ&Keiさんと3人で作品を作りました。いいだ人形劇フェスタはもちろん、台湾や韓国のフェスティバルでも上演できて良い刺激をもらいました」。

令和2年からは、いいだ人形劇フェスタを通じて縁がつながった「ITOプロジェクト」の作品『高丘親王航海記』に客演として参加。新しい事にも積極的にチャレンジし、自身の表現の幅を広げています。

「多くの出会いがあり、つながりが生まれたのもいいだ人形劇フェスタのおかげ。感謝していますし、これから恩返しをしていかなければと思っています」。

仕事に励みながら舞台に立つ“二足のわらじ”生活を15年間続けてきた後藤さんに転機が訪れたのは3年前のこと。体調を崩し、腰の手術を受けたことを機に転職し、現在はNPO法人いいだ人形劇センターの職員として新たな気持ちで人形劇と向き合っています。



## こどもたちの心に寄り添う人形の力

「人形劇の一番の魅力は人形がしゃべるということ。人形やぬいぐるみは、置いてあればそのままですが、人が手を加えて動き、しゃべりだしたとき、そこに『命』が見えるんですよね」。

現在、後藤さんが主に携わっているのは、いいだ人形劇センターが営むコミュニティー施設「ほっこり」の企画・運営です。人形を活用した居場所作りを目指し、ワークショップやイベントを開催するほか、こどもから年配の方まで誰もが気軽に立ち寄ることのできる場所として開放しています。

「この業務に携わるようになって気付かされたのが、人形遊びから生まれるコミュニケーションの力です。小さな子でも人形を渡せば、動かしたいという気持ちが生まれますし、遊びながら自然と演じ始める。その瞬間から表現者になっているんですね。また、人としゃべるのが苦手な子でも、人形を介せば話ができるかもしれません。こどもたちの心に寄り添う人形の力はすごいと感じました」。

後藤さんがこどもたちに伝えたいのは「答えは一つではない」ということ。「感情や考えを言葉でうまく表現できないこともあるでしょう。でも、例えば体で表現してみたり、つらかったら文字や絵を書いてみたり、人形を介して表現することだってできる。自分なりの方法を見つけられたらそれでいい。こどもたちに伝え続けていきたいですし、力になりたいですね」





## さらなる進化を目指して

昭和54年に「人形劇カーニバル飯田」として始まり、歴史を重ねてきた人形劇フェスタ。「学生時代にボランティアを経験して舞台芸術や声優の道に進んだ人や、大学時代に人形劇フェスタを経験してプロ劇団に入った人もいます」と後藤さん。見る側だったこどもたちが劇団を組んで演じる側になったり、ボランティアとして支える側になったりと良い循環の中で、この地に人形劇の文化が根付いています。

「文化が根付いた背景には、厳しくも温かな眼差しで見てくださるお客様たちの力が大きいと思います。人形芝居や歌舞伎、獅子舞などの文化芸術が脈々と続いてきた地域だからなのか、飯田の人は目が肥えていますよね。アンケートや口頭で、賛否両論さまざまなご意見を頂きますが、それがあるからこそ“みる、演じる、ささえる”のトライアングルが成り立っている。自己満足で終わらせるのではなく、寄せられる声を参考に修正をかけるなど、私自身も向上する機会を頂いています」

一方で、近年、全国各地で新たなフェスティバルが立ち上がり、出演劇団が分散してしまうという悩みも。

「そんな状況の中でも『やっぱり飯田は違うよね』『魅力があるから飯田で演じたい』と感じてもらえるような取り組みは必要かなと思っています。こんなに文化が豊富な地域ですから、人形劇を一つのコマにしながら発展させてつながり、魅力を発信していきたいですね。もちろん、自分自身も進化していきたいですし、進化しなきゃいけないと思っています」と、力強く語る後藤さん。デビューから18年、表現者としての挑戦はこれからも続きそうです。





Curtain Call  
いいだ文化の軌跡

## 人と人、地域を結ぶ市民オーケストラ 飯田交響楽団

オープニングを飾ったのは、ヨハン・シュトラウスI世作曲の「ラデツキー行進曲」。活気あふれる演奏に客席からの手拍子が加わり、飯田交響楽団の第30回定期演奏会は華々しく幕を開けました。記念すべき節目となった今回の演奏会では、30年間の歴史を振り返る意味も込めて、第1回定期演奏会でも演奏したシベリウス作曲の「交響詩 フィンランディア」やチャイコフ斯基作曲の『くるみ割り人形』より花のワルツ」など、団の創立当時から折に触れて演奏してきたレパートリーを演奏。また、昨年度まで名古屋フィルハーモニー交響楽団でコンサートマスターを務めていたバイオリニスト・日比浩一さんをコンサートマス

ターに迎え、リムスキイ=コルサコフ作曲の「交響組曲シェヘラザード」では日比さんがバイオリン・ソロのあでやかな音色で聴衆を魅了しました。

団員一人一人が息を合わせ、弦楽器、管楽器、打楽器の音色が重なり合うことで生まれる豊かなサウンドこそオーケストラの魅力。ステージと客席が一体となる温かな雰囲気の中、多彩な響きが会場を満たしました。

### 飯田交響楽団のあゆみ

「あなたの街で、あなたの管弦楽を！」。そんなキャッチフレーズと共に、飯田交響楽団の創立を呼びかけるチラシが配布されたのは平成5年春のこと。平成元年から飯田市を会場に始まった「アフィニス夏の音楽祭」(プロオーケストラ団員のための音楽セミナー)が5年目を迎え、「飯田下伊那にも市民オーケストラを」との機運が高まり、広くメンバーの募集を行いました。

この時集まったメンバーは実に80人以上！



日比 浩一さん

飯田市内で活動していたアマチュア音楽団体「飯田室内管弦楽団」のメンバーだった矢高仰児さんが初代団長を務め、音楽監督兼指揮者に当時飯田女子短期大学教授の高野之利さんが就任。前例がない中、練習方法などを模索しながら、6ヶ月後の12月26日に初の定期演奏会を成功させます。以来、年1回のペースで定期演奏会を開催し続け、飯田の音楽シーンを彩ってきました。

定期演奏会ではさまざまな音楽家との共演を果たしています。第6回定期演奏会では地元出身で当時国立音楽大学名誉教授だった小笠原長孝さんとウェーバーの「クラリネット協奏曲」で共演。これをきっかけに、以降地元にゆかりのある音楽家や団体を招き共演しました。アフィニス夏の音楽祭での縁から、日本を代表する指揮者・下野竜也さんやバイオリニスト・四方恭子さんを始め、国内外のプロオーケストラで活躍している音楽家や、飯田下伊那地域を拠点とするピアニスト、声楽家などと共に演を重ね、地域で生まれ育った市民オ



ケストラとして、地域と人々とのつながりを大切に活動してきました。



### 地域に音楽の種を

同楽団の創立10周年(平成15年)、創立20周年(平成25年)の二度にわたり、記念事業として企画されたのが「『第九』演奏会」です。いずれも合唱団員を公募し200名を超える合唱団と共に1年間かけて練習を重ね、歓喜のメロディーを披露。オーケストラと合唱が奏でる荘厳な音楽に、満員の客席からは「ブラボー！」の声と共に盛大な拍手が送られました。

さらに同楽団が力を注いでいるのは、こどもたちに生の音楽を届ける活動です。

「アフィニス夏の音楽祭」には、こどもたちへ贈る特別演奏会「あいうえ音楽館」にセミナー講師・受講生、地元演奏家らと共に出演し、平成21年から始まった「オーケストラと友に音楽祭」には、立ち上げ当初から実行委員として参画。地元アマチュア演奏家のための「音楽クリニック」や、音楽を身近に届ける「そよ風☆コンサート」などに積極的に参加すると共に、企画運営にも携わってきました。また、平成28年から始まった「小学生のための音楽ひろば(現オケ友音楽ひろば)」では、地元の小中学校の音楽教諭や名古屋フィルハーモニー交響楽団と共にプログラムの研究を重ね、こどもたちに音楽と触れ合う機会を提供しています。



### 飯田交響楽団の歴史

- 平成5(1993)年6月  
飯田交響楽団設立、練習開始
- 平成5(1993)年11月  
伊那谷文化芸術祭に初出演
- 平成5(1993)年12月  
第1回定期演奏会
- 平成6(1994)年8月  
アフィニスセミナー  
「あいうえ音楽館」に出演
- 平成8(1996)年2月  
市民創作ミュージカル  
「かざこし姫となかまたち」に出演
- 平成15(2003)年11月  
創立10周年記念  
「南信州に響け！第九」演奏会
- 平成21(2009)年5月  
オーケストラと友に音楽祭が誕生
- 平成25(2013)年12月  
創立20周年とオーケストラと友に音楽祭5周年を記念した「第九」演奏会
- 平成28(2016)年5月  
オーケストラと友に音楽祭  
「小学生のための音楽ひろば」に出演
- 平成30(2018)年9月  
創立25周年記念演奏会  
下野竜也氏を指揮者に迎えて開催
- 令和6(2024)年10月  
創立30周年記念演奏会  
日比浩一氏をコンサートマスターに迎えて開催



写真右から

団長 矢高 森人さん バイオリン  
事務局 木下 久さん チェロ  
団員 原二三さん チェロ

## Interview 飯田交響楽団の皆さん 「音を生み出す喜び」を仲間と共に

### 一入団のきっかけは?

**矢高** 私は中学、高校と吹奏楽部に所属し、進学で地元を離れた後も音楽は続けていました。平成11年に地元へ戻ったことを機に入団しました。

**木下** 私も楽器経験者ですが、大学を卒業して地元へ戻ってからは音楽と離れた生活を送っていました。そんな時、団員募集のチラシを目にして興味を持ちました。

**原** 私も木下さんと同じく、飯田にアマチュアオーケストラができるというチラシを見て「これは、ぜひ入りたい!」と設立総会から参加しました。森人さんのお父さんである矢高仰児さんが初代団長でしたよね。

**矢高** さかのばれば、設立に至るまではいろいろな流れがあったようです。公的な資

料はほとんど残っていないのですが、飯田交響楽団の創立に当たり、当時「飯田室内管弦楽団」のメンバーだった父と熊谷洋一さん、コントラバス奏者でプロオーケストラの経験もあった高野之利さんの3名が音楽的な中核を担っていたことは間違いないようです。

**木下** 加えて初代事務局長になったのが、地域のさまざまな文化活動を担っていた小澤廣人さん。当初はその4名が中心でしたね。

6月にスタートした時点で「12月に定期演奏会をやります」と宣言してしまいましたから、とりあえず「6カ月で何曲か完成させなければ」という切羽詰まった雰囲気もありました。私も何年かブランクがあったし不安だったけれど、なんとかやり遂げましたね。事務局長だった小澤さんが練習に出てこない人には電話をかけるなど発破を掛け成し遂げられた部分は大きかったかもしれません(笑)。

**原** 私も含めて、演奏技術に関しては本当に拙い時期がありました。プロ級の腕前から初心者までいろいろな人がいる中で、4名が先導してくれたから、なんとか継続できたんじゃないかなと思います。

**木下** 運営の形も定まっていない中で、だんだん形になっていったというかね。

**原** 特に高野先生はプロとしての経験もありましたから、オーケストラの楽譜の読み方とか「楽譜をクリアファイルに入れているようではダメ。言わされたことはすぐに書きなさい」とか「足を投げ出したようなだらしない格好で指揮者の言葉を聞くのは失礼だ」とか基本的なことを私たちに示してくれて。趣味は趣味ですが、音楽を作っていく心構えみたいなものを教えてもらった気がします。



事務局員 木下 久さん

### 一活動を通じて得られたものは?

**矢高** 得られた…というより、ここはもう「居場所」ですよね。ここに来れば、家族とは違うけれど何十年と同じ時を過ごしてきたメンバーがいる。さらなる上達を目指す人々、ゆっくり取り組みたい人などそれですが、みんなで一つの音を生み出す中で、ここにいるのが楽しいと感じているからこそ続けられるんじゃないでしょうか。



団長 矢高 森人さん



## Interview 日比 浩一さん

初めて飯田を訪れたのは平成7年の「アフィニス夏の音楽祭」です。各地から集まつたプレーヤーと合奏したり、レッスンを受けたり、ホテルのロビーでお酒を飲みながらセッションをしたりと、楽しい時を過ごした経験は自分の糧になりました。また街の雰囲気やレッスンを支えてくれる地域の方々、お客様の温かさも心に残っています。飯田文化会館から見える山々の景色も好きですし、食べ物もおいしいし、いい飲み屋さんも多い。その感動は何度訪れても変わることはありません。

その後、20年間続いた「アフィニス夏の音楽祭」が「オーケストラと友に音楽祭」へと移行し、その根幹を名古屋フィルハーモニー交響楽団が担う結果になったことで、私は幸運なことに楽しい

思いを継続することができました。自分が得た学びを若い人に伝え、恩返しなければと考えていたこともあり、コンサートマスターとしてそのような機会をくださった飯田交響楽団の団長や団員の皆さんに心から感謝しています。

飯田交響楽団のメンバーは向上心があり、熱心です。また人口から考えても、この規模のオーケストラがあるのはレベルが高い証。さらにすごいと思うのは楽器というアナログなものに真摯に向き合っている中高生が多いことです。クラシック業界では全国的に高齢化が問題視されていますが、この街ではそんな心配もないんじゃないかな。今後、意思を持った若い人たちに飯田交響楽団が築いてきた良いものが受け継がれ、発展することを願っています。



### PROFILE | HIBI Koichi

バイオリニスト

元 名古屋フィルハーモニー交響楽団  
コンサートマスター

1961年生まれ。京都市立芸術大学音楽学部卒業、同時に音楽学部賞を受賞。神戸室内合奏団(現・神戸市室内管弦楽団)ソロバイオリン奏者、関西フィルハーモニー管弦楽団コンサートマスター、名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターを歴任し、2024年4月より大阪音楽大学教授。大阪樟蔭女子大学客員教授、名古屋芸術大学非常勤講師。

**木下** 私も30年以上いますから、趣味でもあるし、ここに来て音を出してみんなと合わせることもやっぱり楽しいなっていつも思っています。また、若い方から年配の方までこんな風に同じ目標に向かって取り組めることはなかなかない。楽器をしていれば年は関係ないですからね。

**原** 私は75歳で最年長ですが、みんなと同じで、なんていうか「生きがい」ですね。技術はまだ拙いんですけど、みんなと音を合わせることで、音楽を作っているなど感じられる時が一番楽しいです。

### 一今後、目指すことは?

**矢高** 話は少し戻りますが、父が家業を継ぐために飯田へ戻ったのが昭和30年のこと。そのときすでにチェロを始めていて、地元で楽器を演奏する方々と交流し「飯田室内管弦楽団」を結成しました。もちろんそれ以前から管弦楽に取り組んできた方々もいたと思いますが、みなさん共通して「いつかはオーケストラを」という願いはあったはず。そんな70年以上も前の「源流の一滴」が広がり、実って結成さ



団員 原二三さん

れたのが飯田交響楽団であり、その思いを引き継いでいかなければいけないという気持ちは私だけでなく皆さんも持っているはずです。

**木下** 確かに30年以上続けてきたこの歴史を絶やしたくないし、そのためにも新しい風を入れたいですね。演奏をいろいろな人に聴いてもらい、どうしたら団員が増えるのかも考えていかなくてはいけない。団員が倍ぐらいになればうれしいですし、特に弦楽器が増えるといいなと思います。

**矢高** 今後、新文化会館の建設やリニアの開通など新たな時代を迎えるに当た

り、不安もあるけれど夢もある。飯田下伊那地域唯一のオーケストラとしてまずはそこまで歴史をつないでいきたいです。

**原** あとは、地域のオーケストラですから、地域の人たちから「あのオーケストラ面白いな」「曲はわからないけれど心に残るな」と感じてもらえるような活動ができたら。一般的にクラシックファンは、地域の1パーセントと言われますが、今はクラシックだからと縛られず、広い視野で音楽を楽しめる人たちが増えてきたんじゃないかな。そういう人たちにアピールができるようなオーケストラになれたらと思います。



取材にご協力いただいた団員の皆さん

## 江戸時代から続く伝統の「大鹿歌舞伎」とそれを支え続けた祖父の生き様に憧れて

さまざまな視点から見た飯田の文化を紹介するコーナー。

今回はダンサー・俳優の石川かおりさんです。大鹿村に300年以上前から伝わる「大鹿歌舞伎」は、村人が役者から裏方までを担う地芝居。その舞台で長年太夫を務め、舞台を支え続けてきた祖父の姿に憧れて移住してきた石川さん。南信州での暮らしや文化、未来への思いなどを聞きました。



— ダンスを始めたきっかけは?

こどもの頃、NHK教育テレビジョン(当時)の「うたっておどろんば!」という番組を見て「ダンスってかっこいい」と思ったのがきっかけです。中学では新体操に取り組み、ダンスの強豪校として知られる高校へ進学してダンスを始めました。

— ダンサーとしてプロになると決めたのはいつですか?

明確にいつ、というのはなくて…。実は、高校3年生の全国大会の頃から自分に限界を感じて体も心も病んでしまい、ダンスから離れてアルバイト生活を送っていました。数年が経ち、改めて「自分は何をしたいんだろう」と考えていたときに「うたっておどろんば!」に出ていたダンサーの方がワークショップを開くと知り、試しに参加してみたら自分でも驚くぐらい踊れたんです。それを機に、もっと自由に踊ろうと決意しました。その後、上京して「うたっておどろんば!」の振付監修をしていた香瑠鼓(かおるこ)さんのアシスタントとして働き始めたのが23歳の時です。

— どんな仕事に携わってきましたか?

コマーシャルやミュージックビデオ、イベントなどにダンサーや振付師として関わることが多かったです。芸能人との共演もあるなど華やかな世界でしたが、それだけでは食べていけず、アルバイトもしながらの体力勝負でした。7年ほど働き、コロナ禍直前までNHK総合テレビジョンの「うたコン」で氷川きよしさんのバックダンサーをしたり、子どもの衣装を担当したりしていました。

— 移住を決意したのはなぜですか?

上京する前から「ゆくゆくはじいちゃんが立っていた大鹿歌舞伎の舞台に立ちたい!」と考えていたからです。直接の引き金はコロナでしたが、南信州で暮らすなら仕事が必要だと思い、働きながら保育士の資格試験を受けるなど数年前から準備していました。

— そこまで大鹿歌舞伎に引かれた理由は?

舞台に立つじいちゃんの姿を見て素直に「かっこいい」と思いました。また、じいちゃんも含めて地域の人たちが、伝統を守らなければと気負うのではなく舞台に立ち、表現することを心から楽し

んでいる姿もいいなと思ったんですよね。大鹿村の絶景を背景に、演者と観客が一体化する瞬間など、あの場所でしか得られないものにも憧れました。

— 南信州の自然で好きなところは?

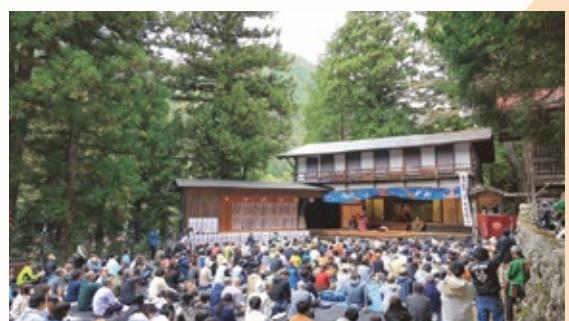
幼い頃「地球って美しいんだな」と初めて心が震えたのが、高台にある祖父の家からの景色でした。だから大鹿村は私と自然をつなぐ原点みたいな場所。市内といえば、近代的なスーパーの背後に大きな山が見えるところかな。そういう一つ一つに感動しちゃうんですよね。山ってすごく時間をかけて作られているものじゃないですか。壊すのは一瞬だけど、壊されることなくそこに残っていることが歴史のつながりだとしたら、すごく尊いものに感じます。それは、文化・芸能にも通じるかもしれません。

— 南信州の文化についてどう感じますか?

正直、移住前は「保育所で働きながら歌舞伎さえできればいい。ダンスは週末の息抜きで…」と考えていました。でも実際はこっちに来てからの方が踊っているかも(笑)。こんなにいろいろなアーティストがいて、文化活動も盛んなことに驚きました。

— 南信州に暮らしてみて感じることは?

今は大鹿村の保育所や学童施設で働きながら舞台活動をしています。こどもたちはかわいいし、仕事も楽しいですね。東京は、刺激的だけど落ち着いて暮らせる場所ではなく「日々をきちんと暮らしたい」と楽しみにしながら南信州へ来て、すごく居心地が良いで



[ vol.3 ]

## 石川かおりさん

憧れの地に  
「移住」した  
視点

[ 写真  
右 ]



壊すのは一瞬だけど、壊されることなくそこに残っていることが歴史のつながり

す。夜の静寂があって、月が明るくて、夕焼けもすごくきれいで。住んでいる人には当たり前のことかもしれないけれど一つ一つが尊いです。

— これから挑戦してみたいことは？

こどもに関わることは続けていきたいです。人形劇フェスタで「旅するりんご」という舞台に出た際、表現したものをこどもたちがそれぞれの感性で受け止めてくれていて、私自身も「お、これは楽しいぞ」と。あとは、南信州の自然とダンスで一体化したいという目標もあります。私は「美しい」の基準って自然の中にあると感じていて。ダンサーとしての表現の目標はそこ 있습니다ね。

— 屋内の舞台と自然の中との違いは？

舞台では客席の方向を意識し、演出、美術、照明を融合させてどう見せるか考えます。一方、自然の中では意識が360度に広がり、いろんな感覚が押し寄せてくる。水一つでも水滴が落ちて波紋ができたり、水音で流れる方向が分かつたり。風も、それ自体は見えないけれど、吹かれている葉っぱを見れば道筋が分かります。踊る時に意識している、ふわっと優しくしたいところや、地に根を張った力強さなど、私が目指している質感は自然に全て宿っている。だから憧れるかもしれません。

— 伝統の継承についてはどう考えますか？

私が大鹿のこどもたちに関わり続ける理由のひとつに、私を介して歌舞伎を身近なものに感じてほしいという思いがあります。こどもの頃に感じた温かなものがどこかに残っていて、大人になって大鹿歌舞伎と一緒に演じられたらすごくうれしい。私が大鹿歌舞伎に関わり続けることも、こどもに関わり続けることも、大きな流れの中でいつかはつながるんじゃないかと思うし、そう願っています。



PROFILE

石川 かおり

1991年、愛知県生まれ。ダンサー・俳優・衣装作家。コンテンポラリー、モダン、ジャズなど多彩なダンス経歴を生かしてコマーシャルやミュージックビデオ、音楽番組などで活躍。振付や衣装も担当するなどマルチに活動の幅を広げる。一方、幼い頃から祖父が太夫を務める「大鹿歌舞伎」に憧れ、2020年南信州へ移住。2021年秋公演で初舞台を踏み、大鹿歌舞伎役者として芸を磨き続ける。近年は舞台演劇にもフィールドを広げ、2024年には飯田市のアーティストとのコラボレーションによる「園原のははき木～源氏物語 帛木・空蟬の巻」(南信州アートラボ)、「旅するりんご」(劇団WAKWAKイイダ)にも出演。自分がソノバイナリージェンダーであることを公言し、ジャンルもジェンダーも越えるパフォーマンスで躍進を続ける。



Pick UP !



# GLIM SPANKY

夢をカタチに。

“原点”となったこの地で最高のステージを

メジャーデビュー10周年を迎える、全国8都市を巡るツアーを開催中のGLIM SPANKY。2025年3月23日、地元・飯田文化会館にてファイナルを迎えます。初の凱旋ライブを前にその思いを聞きました。



亀本寛貴〔ギター〕 松尾レミ〔ボーカル・ギター〕  
(飯田市出身) (豊丘村出身)

**GLIM SPANKY** グリムスパンキー

豊丘村と飯田市出身の男女二人組ロックユニット。ハスキーボーカルでオンリー・ワンな松尾レミの歌声と、ブルージーで情感深く鳴らす亀本寛貴のギターが特徴。特に1960~70年代の音楽やファッショントレンドなどのカルチャーに影響を受けており、それらをルーツに持ちながら唯一無二なサウンドを鳴らしている。

2007年結成。2014年メジャーデビュー。2018年日本武道館ワンマンライブ開催。同年、「FUJI ROCK FESTIVAL」GREEN STAGE出演。2024年6月

でメジャーデビュー10周年を迎える、アニバーサリーを記念した自身初のベストアルバム『All the Greatest Dudes』を11月27日に発売。2025年2~3月には全国8都市ワンマンツアー「All the Greatest Dudes Tour 2025」を開催。

劇場版「ONE PIECE FILM GOLD」書き下ろし主題歌「怒りをくれよ」をはじめ、ドラマや映画、アニメなどの主題歌を多数手掛けるほか、ももいろクローバーZや上白石萌音、DISH//、野宮真貴、バーチャル・シンガーの花譜など、幅広いジャンルでアーティストへの楽曲提供も精力的に行っている。

— 10周年おめでとうございます。お二人にとってどんな10年でしたか?

亀本 最初の5年間は「自分たちの音楽を届けたい」とがむしゃらに駆け抜けた期間でした。日本武道館や大きなステージにも立てましたが、その後はコロナ禍で動けない時期もあったので、あっという間のような長かったような気持ちが混在しています。

松尾 デビュー後の日々も濃厚でしたが、GLIM SPANKYとの活動は松川高校時代から17年になるので、ライフワークとして息を吸ったり、水を飲んだりするようにナチュラルに曲を作りライブをして、変わらず純粋な気持ちで続けてこられたかなと思います。

— 凱旋ライブが決まった時はどう感じましたか?

亀本 「やっとできるな」という一言に尽きます。いろいろな方から「飯田でやらないの?」と声をかけていただきましたが正直、自信がなかったというか…。人口比で考えたとき、飯田文化会館を満席にするのは簡単じゃないと感じていて。

松尾 文化会館って「郡音」※1のイメージがあるからめっちゃ大きい気がするよね。グリムを知っている人がどれくらいいるんだろう…ってドキドキしながら、でも開催できるのは光栄だし、いい日にしたいなと思います。

— 地元でバンド活動をしていた高校生時代、印象に残っているステージは?

松尾 ライブハウスでのオムニバスライブです。それに出るために曲を作ったり練習したり、特別な時間でした。

亀本 あそこで演奏するの、最初怖かったよね。

松尾 そう!だって自分の親世代のめちゃめちゃ上手いおじさんとか、玄人だらけだったもん。そんな中で経験も浅い高校生が、とりあえず作ったオリジナル曲を「どうだ!」って顔で披露しなきゃいけないから、かなり鍛えられました。でもだからこそ東京でも臆することなくできたと思います。

— 地元を離れて改めて飯田の「文化」について感じたことはありますか?

亀本 変わった街だったなと(笑)。こんなに歌を歌う文化って他の地域にはないらしいです。「郡音」のこととか、話すとびっくりされますね。「人形劇フェスタ」も小さい頃から好きだったし、あとは普通に街並みとか…映画館があってSLがあって。そういう景色って心から離れないし、創作との関係もゼロではない気がします。

松尾 確かに。私は飯田の風景を歌詞にすることもあります。例えば、アルバム「The Goldmine」の中の「真昼の幽霊」と「Summer Letter」は、飯田市立図書館や飯田市美術博物館の前の道をモデルに作った曲。晴れた日の昼間、それまで人がたくさんいたのにお昼時になるとふと人がいなくなる瞬間があって、でも気配は残っていて、ラーメン屋にみんな並んでいた

り、どこからおいしそうな匂いがしたり…。そんな平和な風景を思いながら作りました。

— ほかにも地元で好きな場所はありますか?

亀本 僕は小学生の頃寄り道ばっかりする子で。当時はまだ座光寺にフルーツラインがなくて、畑や山の中を毎日ザリガニやカブトムシを獲りながら帰っていたので、通学路が印象深いです。

松尾 私は、通っていた保育園から小園という地域へ抜ける道。田んぼや虫のいる川、山を見ながら散歩するのが昔から好きです。あとは友達と豊丘のてっぺん公園に行ったり。改めて、山や自然ってかっこいいなって思います。自然から得られるパワーって大きいし、村にいたときは当たり前にそれを享受していたんだなと。帰省して触れられる場所に自然があると生き返るし、キラキラしてる素晴らしいものだなと思います。

— 凱旋ライブでは地元の皆さんにどんなことを伝えたいですか?

亀本 かっこいい姿を見せる!僕はこの一心です。地元出身で音楽を頑張っているやつらがいて、しかもちゃんとかっこいいんだって感じてもらうことが使命だと思います。

松尾 私は高校生の頃、ミュージシャンやテレビで働いている人を雲の上の存在だと思っていました。でも高校3年で「閃光ライオット」※2のステージに立ったとき、雑誌で見ていた人や、いつも聞いているラジオのパーソナリティーを目の前にして「この人たちは実在している普通の人なんだ」って気づいたんです。音楽をやりたいって言ったとき「雲を掴むような話を」って笑われたこともあったけど、その道で生きている人を見る機会があったからこそ希望になったし、本当にやりたいことを「夢」じゃなくて「目標」だって堂々と言えることができました。同じように中高生や人に言えない目標がある人がグリムのライブを見て、希望を見出してもらえるきっかけになれたらと思います。

— 最後に地元の皆さんへメッセージをお願いします。

亀本 凱旋ライブでちゃんとできなかつたら…って気持ちもあったけど、今は「やってやろう」と気合いが入っています。本気で頑張ります!

松尾 こんな素敵な場所が地元でよかったです、離れていてもいつも思っています。同じ地域で育った実行委員の方々とライブを作り上げることができるのもうれしいし、皆さんに見てもらえるのもうれしい。最高のステージにするので、ぜひ遊びに来てください!

※1 飯田下伊那地域の小中学校児童生徒が学校毎に歌声を披露する「都市連合音楽会」。

※2 2009年に開催されたSonyMusic主催の十代限定の夏フェス。GLIM SPANKYはこの時、全国5500組の中から14組のファイナリストに選ばれた。

## GLIM SPANKY 南信州凱旋ライブ実行委員会



初の凱旋ライブを地域全体で盛り上げるべく、豊丘村と飯田市の呼びかけにより、飯田下伊那の高校生から一般まで97人の有志による実行委員会が立ち上がりました。

ライブの企画運営はもちろんのこと「GLIM SPANKYを知ってもらうこと」「来場者に楽しんでもらうこと」「10周年をお祝いし応援すること」をテーマに、さまざまな関連イベントを企画。GLIM SPANKYの活動の軌跡をたどる資料の展示や応援メッセージ集め、地元企業や飲食店への応援企画協賛の依頼、伝統工芸の水引細工を手作りして来場者に配布など、ライブの成功に向けて活動しました。

## 新しい文化会館の整備検討状況

(令和6年3月以降)

令和4年6月から新文化会館整備検討委員会において、基本構想について議論を重ね、パブリックコメントを経て令和6年3月、基本構想を策定しました。

令和6年  
3/28(木)

### 第11回 整備検討委員会

#### 基本構想の報告

#### 特別対談「基本計画に期待するもの」

第1部では、基本構想の内容について確認を行いました。その後、議論を重ねてきた整備検討委員全員から、「ライブで見ることの価値を訴えかけていく必要性」や「日常の中でこどもたちが文化に触れたり、多くの人が気軽に集える環境を提供したりすることの重要性」「飯田の良さを生かしながら次世代につないでいくことへの期待」など感想が述べられました。

第2部では、学識委員と整備検討委員長によるパネルディスカッションが行われました。「基本計画に期待するもの」をテーマに、企画運営や舞台に立つ視点などから意見が交わされ、基本計画への期待が寄せられました。



令和6年  
8/23(金)

### 第1回 専門家会議

#### 基本構想の実現に向けて

新文化会館整備検討委員会でまとめられた基本構想の実現に向けて飯田市新文化会館整備に関する専門家会議が始まりました。専門家会議の委員は3名。舞台芸術・文化施設・空間デザインなどに関する有識者で構成しています。会議では、市側から下記3点の現在の状況とそれに伴う課題が提起され、意見交換が行われました。

#### 基本構想策定後に整理された現在の状況

- 建設費が急激に高騰し先を見通せない状況になってきている
- 基本構想を具現化するためには広大な敷地が必要となる（確保済みの市有地なし）
- リニア中央新幹線の工期延長に伴い、市の長期財政見通しの見直しが必要となる

#### 現状の課題をいかにプラスにできるか 「集う」の実現に向けた整備方法を検討

他地域の文化ホールの事例を参考にしながら、建設費や敷地の課題を中心に話し合われ、課題解決のアイデアとして、ホールや諸室を1カ所に整備する方法のほか、複数の建設地に分け、段階的に整備する方法も示唆されました。

令和6年  
11/12(火)

### 第2回 専門家会議

#### 施設の整備方法について検討

建設費の高騰や広大な敷地の確保、リニア中央新幹線工期延長による飯田市の長期財政見通しの見直しという現状があるなかで、基本構想の実現を念頭に、メインホール・サブホール・人形劇場の一体整備と分散整備、それぞれの優位点や課題について意見を交わしました。

#### 専門家会議で出された意見のポイント(抜粋)

- 施設構成は、市民の皆さんが現在の飯田文化会館などの既存施設でどのように活動をしてきたかを考慮することが必要では
- 交流促進と創造支援の機能が「飯田ひろば」のメインのコンセプトであり、そこに他の機能をどのように付随させるかが重要
- アクセシビリティは重要なポイント。車を運転しない方々の「集まる」への対応が必要
- 分散整備は複数の箇所で人の賑わいが施設の外にじみ出るのは魅力だが、施設構成など考慮する点は増える

令和6年  
12/19(木)

### 第12回 整備検討委員会

#### 分散整備は、基本理念にどう影響する? ～「集う」の実現に向けて～

これまで開催した専門家会議において、建設費高騰、敷地確保といった課題を考慮し、基本構想の実現に向けて、どのように整備していくか検討する中で、施設を分散して整備するという選択肢もあるのではないかという意見が出されました。これを受けて整備検討委員会では、施設を分散して整備するとした場合、基本構想の実現にどのように影響するのか、グループに別れて意見を交わしました。

#### 整備検討委員からの意見(一部)

- 「分散」の輪の大きさにもよるが、波及し合いつながりが生まれ、回遊が生まれるのであれば、施設が分散しても、新しい集い方が生まれる可能性もあるのでは
- それぞれの施設が有機的につながり、一つの方向に向かえるかが重要。どういうつながり方ができるか、役割分担や補い合い方が大事になってくる。「集う」をどう実現するかを各施設が連携して、実行していく必要がある
- いずれかの整備の方法を検討すると同時に、新しい交通手段も考えながら、どこの場所になどても建物だけでなく周辺を含めた有機的なつながりが生まれる「環境」をつくる意識を大事にしていきたい

今回の専門家会議と整備検討委員会を通じて、基本構想で掲げた基本方針の一つ「集う」が強調され、施設が分散しても、分散した施設間が有機的につながる、アクセスしやすさ、周辺のまちとつながりが生まれる環境づくりなどを求める意見が寄せられました。

各会議で寄せられた意見などを考慮しながら、令和7年度にかけて基本計画づくりを進めます。

## Report 飯田文化会館 集まるを“ゼロ”から考えるワークショップ

令和6年11月8日、22日、12月13日の3日間。飯田文化会館にて「これからの時代、人が集まる文化施設とは」をテーマとしたワークショップを開催し、公募で集まった主に飯田下伊那在住の延べ約90名が参加しました。今の文化会館でも新しい文化会館でも、もっと多くの皆さんのが集まって、これから活動を盛り上げていこうとしたとき、どのようなアイデアがあるか。参加者は4つのグループに別れ、意見交換を行いました。

それぞれ活発な議論が行われ、最終日は全員で輪になり、アイデアや感想を一人ずつ発表。“集まること”について参加者からは、「楽しい経験や新しい関係を生む」といった意見をはじめ、「目的があると集まりやすい」「行くと安心できる環境が人を引き寄せる」「継続性を保つには、自発性や好奇心が必要」など、さまざまな意見が出されました。また、集まることが自己開発の場であるといった意見から、文化会館がそのような役割を果たすことにも期待が寄せられました。



## 令和7年度 飯田文化会館事業計画

2025年3月現在

4月	人形劇定期公演	12月	森のぽかぽかクリスマス
5/3-6	オーケストラと友に音楽祭2025	12月	コンサートア・ラ・カルト vol.83「クリスマスコンサート」
5/18	オーケストラと友に音楽祭 基礎コース	12月	人形劇定期公演
5/25	コンサートア・ラ・カルト vol.81「フレッシュ・コンサート」	12月中-下旬	ましゅ&Keiのクリスマス会
5月	人形劇定期公演	12月	にこにこステージ vol.74
7月	森のかみしばい劇場	1月上旬	初春を寿ぐ竹田人形館
7月中旬	いいだ人形劇フェスタ2025「プレフェスタ」	1月	人形劇定期公演
8/7-10	いいだ人形劇フェスタ2025	2月	りんごっこ劇場
8月	にこにこステージ vol.73	2月	保育士人形劇研修会
9月7日	飯田フォークフェスタvol.5	3月	にこにこステージ vol.75
9月	コンサートア・ラ・カルト vol.82「秋の彩コンサート」	3月	人形劇定期公演
9月	人形劇定期公演	調整中	第46回おいでなんしょ寄席
10月	ダンボール獅子舞ワークショップ	調整中	飯田信用金庫presents 第22回萩元晴彦ホームタウンコンサート
10月	人形劇定期公演	通年	人形劇講座(初級コース・サポートコース・ユースクラブ)
11月の毎日曜	第39回伊那谷文化芸術祭		詳しくは、飯田文化会館のウェブサイトをご覧ください

情報誌のタイトル「toi toi toi(トイトイトイ)」。幸運や成功を祈るドイツの「おまじない」で、世界中の舞台で使われている言葉です。開演直前に誰もが緊張している中、舞台上や舞台袖で「うまくいくよ!」「大丈夫!」と、仲間の成功や幸せを祈り「toi toi toi」と声を掛け合います。

このタイトルには、「to i」愛の方へ、私(I)の方へ、飯田(IIDA)の方へ、人の方へ、という意味も込められています。

新文化会館整備検討委員会やワークショップで出された「みんなが(誰もが)集う」「ワクワク感」「楽しむ場」「飯田ひろば」の実現を願い、みんなで共有できる掛け声としてtoi toi toi!

掲載している記事の動画を、飯田市の公式YouTubeチャンネルにて公開中です。ぜひご覧ください。



飯田文化会館 情報誌 toi toi toi ! 3号

2025年3月発行

制作 | 飯田文化会館

〒395-0051 長野県飯田市高羽町5丁目5-1

TEL. 0265-23-3552

企画・編集 | toi toi toi ! 制作チーム

取材・文 | 平松 優子

写 真 | 中島 拓也

デザイン | 北林 南 (合同会社 伊那谷サラウンド)

イラスト | オリハラ ケイコ

南信州凱旋ライブ

# GLIM SPANKY

All the Greatest Dudes Tour 2025

2025.3.23 飯田文化会館



GLIM SPANKY 10th ANNIVERSARY



メジャーデビュー10周年 & 南信州凱旋ライブ開催

おめでとうございます

これからもいつまでも応援しています

心を込めて toi toi toi

本誌12ページ、インタビュー記事掲載!!